81　誌上発表　水穴五十七穴と『甲乙経』の主治の比較

齊藤　珠恵
日本鍼灸研究会

はじめに

東洋医学においては，水病は，主に腎が虚して水の制御が出来なくなるために生ずる病とされる．『素問』水熱穴論に「水病，下為附腫大腹，上為喘呼」「肺為喘呼，腎為水腫」とあるように，代表的症状は，体の一部または全身が腫れるなどの，所謂浮腫である．

『素問』水熱穴論には，水病に関する治療穴が57穴挙げられている．この57穴とは，陰の気が集まり，水の気が出入りする穴であって，「水穴五十七穴」と呼ばれ，やはり同篇に見える熱病の治療穴「熱穴五十九穴」と対応するかたちとなっている．この「水穴五十七穴」は，同じ水熱穴論では「腎兪五十七穴」とも称されている．また気穴論では「水兪五十七穴」，『霊枢』四時気篇にも「風疥膚脹，為五十七痏」と見える．

水穴の具体的な穴名とその位置や鍼灸法は，水熱穴論の王冰注に記載されている．ただ，それらの穴が，最古の経穴書『明堂』を引いた『甲乙経』の主治条文でも水病の治療穴となっているかどうかについての検討は，これまで行われたことがないようである．そこで，本研究では，王冰注に見える水穴五十七穴と『甲乙経』の当該穴の主治条文との比較を通じて，この問題の検討を行った．

検討方法

底本として，『素問』は顧従徳本を使用し，郭靄春『黄帝内経素問校注』を参照した．『甲乙経』は『古今医統正脈全書』所収本を使用し，黄龍祥校注『黄帝鍼灸甲乙経』を参照した．検討方法は，『素問』王冰注で挙げられている水穴五十七穴について，『甲乙経』の同名穴の主治条文の中に「水病」に関連する記載があるかどうかについて調査を行った．

結果

水穴五十七穴は，背部，腹部，下肢の三部位にわたっている．背部の穴は，水熱穴論の経文では「尻上五行，行五者，此腎兪」とされている．「腎兪」はすなわち「腎之兪」である．水熱穴論の王冰注によれば，経脈との所属関係は，督脈が5穴，足の太陽膀胱経が10穴（左右で20穴），合計で25穴である．腹部の穴は，水熱穴論では「伏菟上各二行．行五者．此腎之街也」とある．この「街」を王冰は「街，謂道也」と解釈している．経脈との所属関係は，足の少陰腎経が5穴（左右で10穴），足の陽明胃経が5穴（左右で10穴）の合計20穴である．下肢の穴は，水熱穴論では「三陰之所交結於脚也．踝上各一行．行六者．此腎脈之下行也．名曰太衝」とある．足の少陰腎経が6穴（左右で12穴）である．

検討の結果，『甲乙経』の主治条文には，57穴中，5穴に水病の記載が見られた．胃倉の主治に見える「臚脹」は，「腹脹」「腫脹」と同義であるが，「臚」に「皮」の義があることから水脹に近いものと考えられる．「臚脹」はまた六元正紀大論や『金匱要略』などにも見える．四滿と気街の主治に見える「石水」は，陰陽別論に「少腹腫」，邪気蔵府病形篇に「［腎脈］……微大．為石水．起臍已下．至小腹垂垂然．上至胃脘．死不治」と見える．復溜の主治に見える「四肢腫」は，『霊枢』癲狂篇に「風逆．暴四肢腫．身漯漯」とあって，多紀元簡の『霊枢識』はこれに注して「此状四肢暴腫也．張氏注雑病篇「膚漯漯然」云，「腫起貌」，是也．下文「身漯漯」亦同」と述べている．陰谷の主治に見える「少腹偏腫」は，邪気蔵府病形篇に「膀胱病者．小腹偏腫而痛．以手按之．即欲小便而不得」とある．

結語

今回の調査で，『素問』水穴五十七穴と『甲乙経』の当該穴の主治条文における水病との一致は，10%未満であることが判明した．また『甲乙経』では五十七穴以外の穴にも水病に関係する主治の記載がある．よって，『甲乙経』の主治条文と水穴五十七穴との関係性は希薄であると推察される．